

横浜開港と近代化

ペリー艦隊の来航

1853（嘉永6）年、最初にペリーが率いた艦隊は2隻の蒸気船と2隻の帆船からなっていました。蒸気船は煙突から煙をはきながら外輪を回し、海流や風向きの影響を受けずに航行することができました。黒く塗られ、大砲を積んだ船は、当時の多くの日本人は目にしたこともないほど巨大なものでした。

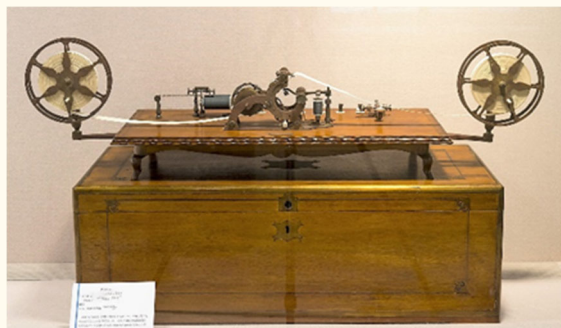
掲げる星条旗の星の数は、当時のアメリカにあった30州の数を表しています。サスケハナ号には、ペリーが乗る旗艦であることを示す旗がマストに掲げられています。



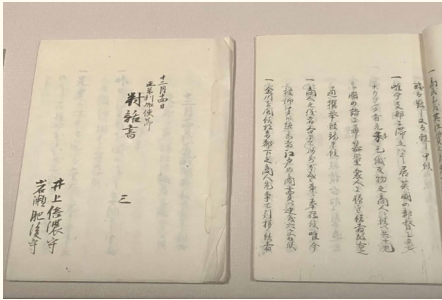
電信機の実演

1854（嘉永7）年、条約の締結のため、再度日本を訪れたペリーは、様々な献上品を持参しました。そのうちの一つであるエンボッシング・モールス電信機は、送信側がモールス符号を打つと、受信側の電信機の紙テープに凹凸の傷（エンボス）がついて、信号を送ることができます。

ペリーは、電線や電池など装置一式を持参し、現在の県庁付近にあった応接所から約900m離れた現在の博物館付近の名主・中山吉左衛門宅の間に電線をひき、通信実験を行いました。



あんせい
安政の5カ国条約



1858（安政5）年、幕府はアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランス、と貿易についての取り決めを含んだ修好通商条約を結びました。これをまとめて安政の5カ国条約といいます。そこには日本に關稅自主權がなく、外国にのみ領事裁判權を認めるなど、不平等な条項が含まれていました。

この条約が結ばれるまで、幕府とアメリカの全權ハリスとの間で13回の交渉が行われました。その記録が「アメリカ使節対話書」です。

横浜居留地の模型は、明治20年頃の開港場の建物を一部再現したものです。開港場は日本大通りの東側を外国人居留地、西側を日本人町に分けていました。外国人居留地には、各国の外交官や商人のほか、宣教師や洋服屋、建築家などの技術者、ジャーナリスト、画家などが住んでいました。外国人は居留地以外での商業活動が許可されていなかったため、輸

きよりゆうち
横浜の居留地



出品の買い付けや輸入品の販売は日本人の商人を通して行っていました。

横浜で日本に初めて入ってきたものには、日刊新聞、ビール、アイスクリーム、ガス灯、街路樹などがあります。

1号機関車

1872（明治5）年、新橋—横浜間（現在の汐留—桜木町間）に鉄道が開通しました。10両の機関車はイギリスから輸入され、機関士もイギリス人を高給で雇いました。開業時、新橋—横浜間は50分強。全区間の運賃は上等が1円12銭5厘、中等が75銭、下等が37銭5厘でしたが、下等運賃でも米が約10kg買えるほど高額なものでした。蒸気船に対して陸蒸気と呼ばれていました。

